

## 2022年11月6日聖霊降臨後第22主日説教

ヨブ記 19章 23-27節

テサロニケの信徒への手紙二 2章 13節-3章 5節

ルカによる福音書 20章 27, 《28-33》, 34-38節

先週の日曜日の朝、教会を訪れたご近所の方から「今年ハロウィンはしないのですか」と尋ねられました。教会とは無関係の行事ですなどと不愛想には答えず、紋切り型に「コロナなので中止です」と答えましたが、ハロウィンは日本の行事として定着したようです。

先週の日曜日はまた、プロテスタント教会の多くで宗教改革記念日でした。10月31日をルターの宗教改革開始の日として、その日に近い日曜日に（プロテスタントでは日曜日以外に原則礼拝をしないので）記念の礼拝をすることになっているのです。聖公会手帳を見ると10月31日に何も特記がありません。思い返しても、日本聖公会で宗教改革記念日を意識することはまずなかったと思います。ハロウィンと宗教改革記念日を並べるのもなんですが、文化的な違いは、簡単に超えられるようで簡単には超えられないというのを改めて感じます。

本日の福音書は、サドカイ派の人々がイエス様に質問をするお話です。皇帝への税金についての質問が続いていますが、そこで冒頭で「**そこで、機会をねらっていた彼らは、正しい人を装う回し者を遣わし、イエスの言葉じりをとらえ、総督の支配と権力にイエスを渡そうとした**」（ルカ 20：20）とあった通り、ここでもイエス様は、敵対者たちから少し意地悪い質問を通して、挑発を受けているのです。

お話は、「さて、復活があることを否定するサドカイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに尋ねた」（ルカ 20：27）という説明から始まります。この部分に最初にサドカイ派について、復活を否定するという説明があります。サドカイ派は、イエス様の時代のユダヤ教の一派です。歴史的事柄としての彼らの特徴は、書かれた律法だけを重要視する人々であり、当時のユダヤ社会では富裕層であったということが挙げられます。また、書かれた律法も口伝律法も重要視し、庶民的な生活をしていたファリサイ派の人々とは、あまり仲が良くなかったと言われています。一方、福音書物語の登場人物として両者は、イエス様と敵対したという点で共通しています。ただし、「ルカによる福音書」においてサドカイ派が登場するのはこの箇所だけです。

そのようなサドカイ派ですが、「ルカによる福音書」が書かれた時代には、エルサレムの神殿崩壊とともに消滅していたようです。その意味では、物語の実際の読者たちにとっては、すでに身近な存在ではなかったかもしれません。そのサドカイ派の人々がイエス様に質問するのですが、その内容自体は《かっこ》にはいつている28節から33節の部分です。

彼らは、「申命記」25章5節以下にある「家名の存続」についての規程を基にして、イエス様に質問します。その規程とは、兄弟が一緒に暮らしていて、結婚している兄が子をもうけずに死亡した場合、弟は、その兄嫁と結婚して子どもをもうけなければならない。さらにその子どもは長男の子どもとするという規定です。律法の中でも家名の存続を優先とした例外規定です。彼らの主張は、もし復活があるとすれば、その規程が7人の兄弟に適応された場合、復活した後、そのひとりの女性は誰の妻になるのかと言う内容です。そのような結婚形態がイエス様の時代も行われていたかどうかは分かりません。しかし、彼らは、主なる神様が与えた律法を基にして、復活について理性的にあるいは常識的に考えたら、矛盾するのではないかという質問をしています。現代でも、律法を基にしなかったとしても、復活という事柄について、人間の理性で考えてみれば、同じような矛盾を感じると思います。

この質問に対するイエス様の答えは、決して論理的ではありません。イエス様は、最初に、「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない」（ルカ20：34-35）と答えます。復活にふさわしい人々は、結婚しないからそのような問題は起こり得ないということです。そしてその根拠は、「この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである」（ルカ20：36）と、死を迎える人とは異なる姿になるからだとしています。「もはや死ぬことがない」は、直訳すれば「もはや死ぬことができない」ですが、それでは少しニュアンスが異なりますので、意味としては今の訳の通りでよいでしょう。「天使に等しい者」は、『聖書』では、ここにしか用いられていない言葉です。あえて直訳すれば「準天使」「天使相当」ということになります。その意味では「天使」そのものではありません。もっとも「天使」とは何かという定義自体があいまいですから、地上の人間ではないということ以外は、はっきりしないといえます。「復活にあずかる者として」というのは意識であり、直訳すれば新しい聖書協会共同訳のように「復活の子（として）」となります。そして、復活して「神の子だから」と説明されているのですが、ここにある「子」は複数形です。「神の子らだから」です。ただし、「神の子イエス・キリスト」と同じく、「息子」を意味し、法律で認められた子を意味します。その意味では、復活した人は、それぞれイエス様と同じような、「主なる神様の法的な子」となると説明されているのです。

このイエス様の説明は、論理的に納得できるかどうかは別にして、復活の姿が、現在の姿とは異なることを強調しています。それは「コリントの信徒へ手紙一」の15章でパウロが説明している内容とおおまかには類似します。ただし、イエス様はここでさらに「死者が復活することは、モーセも『柴』の個所で、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、示している。」（ルカ20：37）と続け、根拠として『聖書（旧約）』を引用するのですが、その箇所は「出エジプト記」の3章6節、15節であると思われます。

現在のわたしたちの『聖書』でその部分は、それぞれ「神は続けて言われた。『わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。』モーセは、神を見ることを恐れて顔を覆った。」(出エ 3:6)、「神は、更に続けてモーセに命じられた。『イスラエルの人々にこう言うがよい。あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主がわたしをあなたたちのもとに遣わされた。これこそ、とこしえにわたしの名、これこそ、世々にわたしの呼び名。』」(出エ 3:15)となっています。どう考えても復活についての根拠とは思えません。無理に関連させるならば、『聖書(旧約)』に共通している事柄である、「主は生きておられる」ということを前提となるので、主なる神様は、「アブラハム、イサク、ヤコブ」という今、生きている人の神であるということでしょうか。「アブラハム、イサク、ヤコブ」もモーセの時代には死んだ人では？という問いは起こさないとして、最後にイエス様は「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである」(ルカ 20:38)と結びます。この部分はほぼ直訳です。主なる神様は生きている者の神であるので、復活はあるということになります。この説明も質問の答えにも、復活そのものについての答えにもなっているとは思えません。

『聖書(旧約)』を根拠にした、サドカイ派のきわめて理性的であり論理的な質問への答えとしては、イエス様の言葉は、少し論理的に強引であるように思えます。この物語にあるイエス様の言葉が、歴史的にはほぼそのままであったかどうかは不明です。しかし、4つの福音書の中で、もっとも秩序だっ構成しているといえる「ルカによる福音書」の著者が、このようなイエス様の言葉を記載しているのは、著者自身もイエス様の答えが論理的ではないことを承知した上でのことでしょうか。つまり、復活とは理性的理解・説明を超えた事柄であると伝えようとしているということです。現代でも復活の出来事自体は、歴史的探究の事柄ではありません。信仰の対象です(また根拠です)といわれることと同じです。

聖書日課では、省略されていますが、物語は最後に、「そこで、律法学者の中には、『先生、立派なお答えです』と言う者もいた。彼らは、もはや何もあえて尋ねようとはしなかった。」(ルカ 20:39-40)と締めくくっています。ここにある「律法学者」がファリサイ派とは限定されないかもしれませんが、復活に関してファリサイ派とサドカイ派では意見が異なっていました。それゆえ、この律法学者の想定がファリサイ派であったならば、この最後の律法学者たちの言葉、聖書日課では省略された部分に、このお話の大切な解釈のカギがあると思います。

ファリサイ派の人びとは、サドカイ派の人々と異なり、決して豊かな人々ではありません。ごく一般的な生活の中で律法を学び、主なる神様を信じる人々です。そのような人々が復活について賛同したということが大切なのです。サドカイ派の人々が復活を否定するのは、おそらく復活など必要なかったかでしょう。貴族階級に近いともいえる彼らは、生きている間に人生の充

実感を味わっています。それゆえ、論理的に矛盾するような対象に希望を託する必要はないのです。そして死は終りとしてそのまま受け入れればよいのです。そもそも『聖書(旧約)』は、人間の命の長さは120年と明記しているからです(創6:3)。

しかし、イエス様の時代(だけとは限らず現代も同じですが)、誰でもそのような充実した人生を歩み、理性的に死を受け入れられるわけではありません。むしろ、そのような人は少ないでしょう。そして、イエス様が接した人々は、個人的な事柄としての病気、悲惨な事件、社会的な差別や不正義、そして、世界的な戦争や政変などさまざまな原因によって、充実した人生どころか、何も希望もないまま人生を終えざるを得なかった多くの人々でした。イエス様は、主なる神様がそのような人々をそのままにしてははずはない。そもそも、この世界の悲惨な事柄も、そして人間の死も、天地創造の初めから当然のように存在する事柄ではない。だから死者の復活は、不思議な事柄だが存在するのだと考えたのだと思います。そして、ファリサイ派の人々も同じように感じたのだと思います。彼らは、けっして豊かではない日常生活の中で、懸命に律法を基にして誠実に主なる神様を信じていました。それゆえ、天地を創造された主なる神様の、ご自身が創られたこの世界に対する本質的意図を考えれば、イエス様と同じような意見になったということでしょう。

イエス様も必要性があるから、復活は存在する、単にそのように考えたわけではないと思います。しかし、イエス様の「**神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである**」という少し強引な言葉は、主なる神様とは、今様々な悲惨な状況で生きている人々の神様であることを強く主張しているのだと思います。なぜならば、すべての人、一人ひとりが、大切な「神の子」であるからです。だから復活は存在するのだという確信につながったのだと思います。この世界がすべてではなく、この世界の命を終えたとしても真の命があることが、希望となるからです。

この世界から悲惨な状況、悲しみや、つらいことが、出きる限りなくなることは大変に重要です。そして、イエス様もそのために活動され、また十字架の道を歩まれました。残念ながら、イエス様の誕生する前もその後も、世界から悲惨な状況はなくなっていない。今も世界の各地で、ことに悲惨な戦いを通して、それらが続いており、これからはわたしたちの国も含めてよりひどくなるかもしれません。しかし、だからこそ、大切なのは、復活を希望として信じ続けることです。復活というあいまいであり非論理的、非理性的事柄に希望を置くとき、人間が理性を基にして自分たちで作り出した希望が、決して完全なものではないことに結びつくからです。地上にいるすべての人間が死を迎える存在である限り、復活はすべての人の希望です。共通の希望です。その希望が社会を主なる神様の「良し」とされた方向へと変えていきます。これかれからもわたしたちは、わたしたちの教会を通して、その働きを担っていきたいと思います。